

所属	言語文化研究科 日本語・日本語教育専攻 修士課程	修了年度	2020 年度
氏名	宮原 章太郎	指導教員 (主査)	池田 広子

論文題目	日本の就職活動のプロセスにおける（元）大学院留学生の内定獲得までの一考察 —文系学生による対応方法の視点から—
------	--

## 本文概要

### 1. 研究背景・研究目的

本研究では、文系の（元）大学院留学生が進めた日本での就職活動のプロセスに着目し、そのプロセスを質的調査により明らかにすることを目的とした。具体的には、（元）大学院留学生が内定獲得に至るまでの対応方法や、どのような問題に対応し、入社先を決める段階に進むことができたかについて明らかにした。

文系大学院に注目した理由は、以下3点である。

- (1) 留学生の就職活動に関する先行研究を概観していく中で留学生の就職活動のプロセスに細かく着目した研究が十分にされていないこと。
- (2) 留学生への支援策に関する提唱や、学部生と大学院生を特には区別せずに調査を実施されているものが多く見受けられ、大学院留学生のみを対象とした調査が少ないこと。
- (3) 文系の（元）大学院留学生の就職活動のプロセスを分析することで、大学院留学生に対して、日本での就職活動に還元できるのではないかと考えたためである。

### 2. 調査・分析方法

調査協力者は、現役の文系大学院留学生1名（韓国人）、文系専攻で大学院を修了していた元大学院留学生3名（中国人）の計4名である。調査方法はインタビュー1回目開始前に調査協力の同意を得た上で、安田・サトウ（2012）の「複線径路等至性モデル」（以下、TEM）等の手法を援用し、コーディングによる質的分析をおこなった。インタビューはプライバシーに配慮しながら半構造化インタビューを2回実施し、各インタビュー後には文字起こしを行った。各インタビュー終了後にはインタビューデータ等を基に作成したTEMの図やその図の流れを理解するためのスクリプトを作成・修正を行った。その他、データや補足情報の確認のために、メールでのやり取りを行った。

### 3. 分析結果

調査協力者4名のデータを個別に調査し、各分析を行った結果、以下3点が明らかになった。

- ①調査協力者のパターンとして多かったのが、大学の援助をほとんど利用していないという点である。例えば、キャリアセンターの利用が「数回以内」または「利用しない」ということだった。その一方で、周囲の援助に頼るものが見られた。例えば、「アルバイト先の上司・同僚」や「周囲の友人」といった調査協力者の身近にいる存在に相談していた。
- ②就職活動開始地点である程度、エントリーを検討し業界を明確化にしている調査協力者は、比較的早い時期から企業からの内定を獲得し、調査協力者自身が納得した入社先を決めていた。
- ③就職活動と学業との両立については、集中的に活動を進めるタイプが見られた。例えば、可能な限り「就職活動だけに集中する期間」を作って進めていた調査協力者が確認された。

#### 4. 全体のまとめ・今後の課題

本調査の分析結果から、大きく3点について述べた。第一に、本調査協力者の多くは「エントリーシートの準備」に対して厳しく感じられ、それに対する対応策として「周囲への相談」や「就職活動の対策本やインターネット」といった方法を活用していた点、第二に、就職活動と修士論文作成といった学業との両立についてはそれぞれで集中して取り組む時期を作って進めていた点、第三に、就職活動を始める地点で、ある程度業界が明確にできている調査協力者が就職活動をスムーズに進められていた点である。

今後の課題として、本調査では調査人数が少なく限定的であった。今後はできる限り調査データを増やし、精緻化していく必要がある。また、就職活動での具体的な克服方法や解決策の提案ができる段階に進むことができれば、大学院生留学生の就職活動の一助となり、その周囲にいる人たちの理解にも繋げることができると思われる。

##### 【参考文献】

安田裕子・サトウタツヤ (2012) 『TEMでわかる人生の径路—質的研究の新展開』 誠信書房